

平家物語を出典とした『敦盛』を能と文楽の両方で観てきました。

私は文楽を今までに3回しか見たことがなく、無学でいわゆる文楽愛好家でもないのですが、能楽と比較して観ると、本当に面白いものです。初めて文楽で「奥州安達原」を観た時は、描写・表現に度肝を抜かれてしまいました。その面白さに今回『敦盛』ではどうなのかと観に行った次第です。

従って文楽全体の魅力というより、能との違いを私流に感じたままですからご容赦下さい。

文楽「一谷ふたば軍記」第一部 初段・二段目(敦盛出陣の段など) 2016年9月5日(月) 国立劇場

この文楽は昼夜二部にわたり上演され長時間。筋書きはとにかく詳細で込み入っていて、入れ子のよな構成です。抽象化、単純化されている能に比べると文楽の大きな特徴かもしれません。

その中で敦盛に関する場面だけを取り上げてみると、敦盛には能では出てきませんが玉織姫という許嫁がいて「軍の事も色事も絵で見たばかりの味知らぬ、行儀育ちの器量よし」。浄瑠璃は古典的な言葉で語りながら世俗的で人情味が溢れています。そのお姫様、ひとたび敦盛への操を立てるためには源氏の武士を刀で刺してしまいます。この場面だけでなく、文楽では殺傷場面が凄くリアル！初めて観た時はとても驚きましたが人形劇ならではの手法でもあるのでしょう。

例えば熊谷直実が、敦盛を波打ち際で打ち取る時でも、刀で首を切るというリアルな動作の後で、本当に首だけがコロッと出てきて、それを腕に抱くという場面があり強烈な印象を受けます。とにかく人形遣いというのは繊細な感情や動きを3人で一つになって表現するので、その巧みさに感心しますが、喜怒哀楽や動きをととても大きく表わして観衆に訴えるのも、文楽ならではのこともかもしれません。

この物語は、第二部で実はという種明かしがあり、直実が一谷で打ち取ったのは、敦盛の身替りになった我が子・小次郎だったという凄い展開があります。何故なら敦盛は後白河法皇のご落胤で、皇室に戻ることができる人だからと・・・。「一の谷ふたば軍記」は歌舞伎にもあり、是非、観てみたいものです。

能「敦盛」 9月7日(水)国立能楽堂 シテ・観世喜正 ワキ・福王茂十郎 地頭・梅若玄祥 後見・観世喜之大鼓・佃良勝 小鼓・曾和正博 笛・赤井啓三 その他

能を余り観たことがないと言う人をご案内するのに、「敦盛」は能の魅力を伝えるのにピッタリの曲です。特にこの日のシテ観世喜正さんは敦盛が当たり役かと思うほど素晴らしかった。前場では直面なので、やはり若さがあって良いし、草刈り男といえ平家の御曹司の身なので気品が漂っていました。

敦盛は笛の名手でもあるので、ことさら笛の音はどうか気になるのですが、この日のお囃子は、全員気張った所がなくて、美しい音色と調子。またワキの福王さんは出家した蓮生法師そのもの。梅若玄祥さんの地頭で謡共々、滅びゆく平家の哀感があつてしみじみとした趣を感じました。

後場は颯爽とした敦盛。長身を生かした姿・いでたち、朗々として張りのある声、幼少の頃から磨きこまれた端正でキビキビとした所作など喜正さんの魅力が存分に発揮され、中の舞も見応えがあり、一気に最後まで魅入り、大満足でした。

今回特に気がついたことは、平家の公達は「中将」「今若」「十六」など、貴公子の白面を使うのが通常だそうですが、この日は女面かと思うほど優しい面で、本当に綺麗でした(あれは何と言う面かしら)。

能『敦盛』は過去を思い返し、死者を弔う。文楽が現在形を見せるなら、その何年後を心の中で思い描く夢幻能であって、同じ題材ながら切り取り方の違いがはっきり認識出来て本当に面白いです。

私にとって『敦盛』で忘れられないことは2000年10月の巖島観月能。シテは友枝昭世さん。能公演は干潮の時刻から始まって、番組が進み、丁度「敦盛」が演じられる頃に、潮がひたひたと満ちてきて、光(照明)が波に当てられ、その反射の波紋が舞台上に渦を描くのです。それが時折、面にも映り、陰影がとても美しい。きっと昔は月明りでしょうか。この幻想的效果のある巖島神社・能舞台を考え付いた人の美意識に感服したものでした。

(注:ふたばは本来、漢字です)

尾崎 純子